通釈『八重葎物語』（その四）

妹尾好信

【キーワード】八重葎、　中世王朝物語

はじめに

中世王朝物語『八重葎』の通訳を試みた。今回はその第四回目で、『広島大学大学院文学研究科論集』第71巻（平成23年12月）掲載の「通釈『八重葎物語』（その一）」、『表現技術研究』第七号（平成24年3月）掲載の「同（その二）」、『広島大学大学院文学研究科論集』第72巻（平成24年12月）掲載の「同（その三）」に続くものである。原豊二氏蔵『八重葎物語』を底本とし、濁点・句読点・かぎ括弧等を付す他は原文通りに翻刻した。同本は静嘉堂文庫蔵本に近いので静嘉堂本との異同を行間に注記し、不審箇所も傍注した。便宜上、『鎌倉時代物語集成』第五巻所収本文の形式段落で区切って通し番号と短い見出しを付けた。引歌・引詩等、典拠ある表現のみ、訳文に＊を付して付注した。訳文は原文を尊重しつつも、主語を補うなど注釈なしで通読できるよう配慮した。引歌の引用本文・歌番号は『新編国歌大観』によった。今回は、第55段落から最終の第82段落までを扱う。

【55】女君死去、人々の狼狽

かくして二日といふあけぐれにきえはて給ひぬ。きたのかた「いみじ」とまどひ給ふ事、いはむかたなし。むつかしげにも見えず、いときよらにらうたげにて、たゞねいりたらむ人のさまして、さゞ（ママ）やかにふし給へるを見る心ちども、あたらしとも中〻也。

大弐もよゝとなきぬ。みんぶのたゆふにいひ合せて、むなしきからをとり出るほど、有かぎりなきのゝしる。この人はましてせきとめむかたなく、かくながらだにみるよの中のならひもがなと、むねもひしげておもへり。

〔通釈〕

こうして二日目の夜明け方に、女君はこと切れてしまわれた。北の方が「大変だわ」とお惑いになることは、言いようもない。ご遺体はうとましげにも見えず、とてもきれいで可憐なさまで、ただ眠り込んだ人のような姿で、小柄な体を横たえていらっしゃるのを見る人々の気持ちは、なまじっか惜しいなどという言葉では表せない。

大弐もおいおい泣いた。民部の大夫に指図して、亡骸を運び出す間、周りのすべての人が泣き騒ぐ。民部の大夫はまして涙を堰き止めようもなく、「せめてこのままでも夫婦となれる世の中の習いがあればよいのに……」と、悲しみで胸をつまらせていた。

【56】侍従、後を追い入水するも助けられ、尼となる。人々追慕

そのわたり近きみつの寺のほうしかたらひ出て、けぶりとなし奉る。侍従なむ、「いくべき心ちもせず。とある事にもかゝることにもはなれ奉らでならひにしに、けぶりにもたちおくれじ」となきこがれて、やがて海にまろび入けるを、人〻はやく見つけて、ひきたすけてけり。「かくまで思ひ入ぬるは有がたき事なれど、ひとりもたる子をうしなひてだにかばかりにおもひなるはかたきわざになむ。まづはわれこそかく。有べき道なれど、なき人のためことなるのちの世のくどくともならざらむ物から、かへりてつみうべき事とおもひかへせば、さはひたみちにも思ひなられず」など、なくくいさめ給へば、「さらばかたちをやつして御はかのみやづかへをだに」とせちに聞えて、あまに成ぬ。

かの御さうぞく・てうどやうの物、さるべきはほとけにくやうし、あま君にも給はせ、又かうながらよの中をわたるべきかたもねむごろに思ひやり給ひて、はかなく七日も過ぬれば、かなしとてもかくて月日をふべきみちにもあらねば、舩こぎ出してくだり給ふに、「うつゝともおぼえず」とて、北のかたはなみだのいとまなくて、海もふかくなる心ちし給ふ。はかなうの給ひ出る一言も、なつかしう物し給ひし物を」とむすめどもも恋聞えけり。

〔通釈〕

そのあたりに近い三津の寺の法師を招き出して、ご遺骸を火葬にお付しする。侍従は、「もはや生きていける気もしません。姫様とは、どんな時にもお離れすることなく慣れ親しんできましたのに、火葬の煙にだって後れたくはありません」と泣き焦がれて、そのまま海に飛び込んでしまったのを、人々がすばやく見付けて、引き上げて助けたのであった。叔母君が、「そこまで深く思い込んだのは殊勝なことですが、ただ一人持っている子を失ってさえ、これほどに思い込むの難しいことですよ。まずは私こそがそうすべき道理ですけれど、そうしたところで、亡き人のためにたいした後世の功徳ともならないでしょうから、かえって罪を得ることと思い返したので、あなたのようには一途に思い込めないのです」と、泣きながらお諫めなさるので、侍従は、「それでは、仏門に入って、せめてお墓のお守りと……」と懇願して、尼になった。

女君のご装束や調度のようなものは、めぼしいものは仏に供養し、尼君（侍従）にも与え、また、このままここで生活していくのに必要な方面も手厚く配慮なさって、はかなく七日も過ぎたので、いくら悲しいからといってこのまま何か月も留まっていられる旅でもないゆえ、大弐一行は船を漕ぎ出して筑紫に向けて下って行かれるのだが、「現実のこととも思えない」と言って、北の方は涙の止まる暇

もなくて、その涙のために海も深くなるような気がなさるのだった。「何げなく言葉になさる一言も親しみが感じられる方でいらしたのに……」と、大弐の娘たちも亡き女君をお慕いした。

【57】中納言、葎の宿に文を送る。隣の主人、女君の死を語る

まことや、かの有しむぐらのやどりへは、立給へりし又の日御ふみ有けり。門さして人けも見えねば、「物まうでやし給ひし。さるにてもひとりふたりはとめ給はぬやうはあらじを、あやしくも有けるかな」とこなたかなた見めぐらせど、かげだに見えねば、此となりによりきて、「しかしか」とたづねければ、あるじの女いできて、まづ打なきていひやるかたなし。いとゞ心えずおもふに、きこゆるやう、「このあなたに物し給ふ姫君の御うしろみは、きさらぎのころほひより大弐の北のかたになりて、『近き程につくしへ物せん』といで立給ふを、いとかなしうし給ひてなきしづみてものし給ふときゝ給へしが、にはかにたえ入せ給ひしかば、『あまりいみじと物をおぼしたるにこそ。さりともいたづらにはならせ給はじ』と思ひあつかひ給けるに、かばかりにかぎりける御命にや、げに其まゝにてたえはて給ひぬれば、誰もくいはむかたなく思ひなげき給へし。むかし物がたりにこそかゝる事は聞つたふる事に侍るを、めに近くも見給へし哉」とて、まがくしう打なきぬ。

〔通釈〕

ところで、例の葎の宿には、女君が発たれた翌日に中納言からのお手紙が届けられた。使いが到着すると、門を閉ざして人の気配もしないので、「寺社詣でにでもお出かけなのかな。それにしても一人や二人は留守番を残しておかれないはずはなかろうに、妙なことだな」と、あちらこちらぐるりと見回すけれども、影も形も見えないので、この隣家に立ち寄って、「これこれなのだが」と尋ねたところ、女主人が出て来て、のっけから涙にくれて言葉にならない。使いはますます事態がのみこめなくなったが、女主人が言うには、「この、向こうに住んでらっしゃる姫君のお世話役は、二月頃から大弐の北の方になって、『近日中に筑紫へ行きます』と言って準備を始めましたのを、姫君はとても悲しくお思いになって泣き沈んでらっしゃると聞いておりましたが、突然人事不省になられたので、『あまりにつらくお思いだからでしょう。そうは言ってもお亡くなりにはなりますまい』と思って介抱していらっしゃいましたが、これまでと定められたご寿命だったのでしょうか、本当にそのまま絶命してしまわれましたので、誰も彼も言いようもなく悲しみ嘆いてらっしゃいました。昔物語にはこんなことは聞き伝えておりますけれど、こんな近くで目撃してしまいましたことよ」と言って、まことしやかに泣いた。

【58】使者、隣の主人の話を信じて帰邸

有べきことゝもおもひかけねど、「なげの哀をつくり出むに、其人に近きゆかりにてだにかうまでなみだのおちぬべきにもあらぬ

を、ましてよそに聞らむあたりをかばかり見ゆるはうきたる事にはあらじ」と思ひたどられて、「いとこそあやしきわざには侍れ。いかで『かくなむ』とはつげ給はざりし。御からはいかゞし給ひてし」ととふ。

「『御なやみのわたりへ聞えさせても今はかひなき物から、かつはまことしうおぼすべき御中にもあらず、数ならざらむ身のなにかは』とて、やがて其よ(日頃)しのびてけぶりになし奉り給ふ。御しるしさへこゝにのこし給はぬは、つくしにとおもひ給へる成べし。『かの今のとのには、あすあさてのほどにかどでし給ふべき』と聞え給へば、かゝるけがらひいみ給ぬべきをりなれば、あなたざまにもふかうかくし聞え給へ(ひ時)し」など、つきゞしく聞えなす。「さらば、かくこそ申さめ」とてかへりぬ。

〔通釈〕

そんなことがあろうとも思えなかったが、「根も葉もない哀話をでっち上げたにしては、当人に近い縁者であってさえここまで激しく涙が落ちそうにもないのに、まして他人(よそ)事として聞くようなことをこれほど悲しむというのはいいかげんなことではあるまい」とあれこれ思いめぐらして、「それはまったく不思議なことですな。どうしてこうだと告げなさらなかったのか。ご遺体はどうなさってしまわれたのか」と尋ねる。

「『ご病人がいらっしゃるところへ縁起でもないことを申し上げても、今さらどうしようもないことですのに、それに中納言様がそれほど真剣に愛して下さっているような関係でもありませんし、取るに足りない身の上の者がどうして申せましょう』」と、すぐにその夜にこっそりと火葬してしまわれました。ご遺骨さえここにお残しにならないのは、筑紫にお墓を作ろうとお思いなのでしょう。例の今のご主人からは、『明日か明後日(あさって)のうちに門出なさる予定だ』と聞こえてきますので、このような穢(けが)れ事は憚り嫌うべき時ですから、向こう様にも深くお隠し申されました」などと、女主人はいかにもそれらしくとり繕(つくろ)って申し上げる。「それならば、そのように申しましょう」と言って、使いは帰った。

【59】中納言、使者から女君の死を聞き、あれこれ思い悩む

参りて有さまくはしく聞えさすれば、「たとへさる事あらむにつけても、『つかひのきたらむに、かくきこえよ』と聞えおく文などはのこすべきを」との給ふ。「それなむたづね侍りしに、『かの御うしろみはすこしなほくしき人にて、おのれをしたひてかく成給ひぬるをいとほしかなしともふかく思ひたらで、行道にのみ心をやりてあわたゝしくいそぎ立給ひしかば、さやうのかたはよも思ひより給はじ』とこそ聞え侍りつれ」と申に、「まことにや」とおぼしよるもゆめの心ちぞする。

「大弐ときけば、その子のたゆふなどやゐてかくしつらむ。けさうじよらむにかたかるべき住ゐかは。みづからの本上はたやわらかになつかしうてつよき所はなかりきかし。いかに思ひかけられては

ふれ行けむ。あはれと思ひしかば、さりともわれをわするゝにはあらぬ物から、心の外にこそゐてゆかれつらめ」と、まだうたがはしきかたはそひぬれど、かぐさだ〳〵ときゝ給ふには、あだ成命をたのみうたがひ給ふべきにもあらねば、又うちかへしなき道におぼしよわるに、いみじうかなし。

「もとよりまことしう思ふべき人にはあらぬ物から、なほ心より外にかくてあらんほどのなぐさめにはます事なくこそ哀なりしか。こゝにしのびてわたしてましを、さりとてそのほどにかぎりたらん命のはかなさはかならずそれによるべきならねど、目の前のわかれはかなしさの一すぢこそあらめ、かつおぼつかなきなげきまではそへざらましを」と、とりあつめおぼしつゞくるに、らうたかりしつらつき、なつかしかりしけはひは、たゞ打むかひたる心ちし給ふに、やがて御なみだのみもよほすつまにぞ有ける。

〔通釈〕

使いが中納言のもとに参上して隣家の女主人から聞いたことを詳しく申し上げると、「たとえそんなことがあったにしても、『使いが来た時にはこう申し上げよ』と、申し置く文などは残すはずだろうに」とおっしゃる。使いは、「そのことを尋ねましたところ、『あのお世話役は少々品性に欠ける人で、姫君は自分を慕ってこのようになられたというのに、かわいそうだ、悲しいとも深くは思わないで、筑紫への旅にばかり気を取られて、慌ただしく仕度をして出発なさいましたので、そういう心遣いはとても思い寄られなかったのでしょう』とのことでございました」と申すので、中納言は「事実なのか」と思い寄られるのも、夢のような気持ちがする。

「大弐と聞けば、その子の大夫などが、彼女を連れ出して隠したのではなかろうか。思いをかけて言い寄るには難しい住居ではない。彼女自身の性格だって、柔和で近づきやすく、強いところはなかったものだ。どんなに思いを寄せられてふらふら出ていったのだろう。愛情を感じていたから、そうは言っても私のことを忘れることはなかろうけれど、不本意ながらも連れて行かれたのだろう」と思って、まだ疑わしいところは払拭できないものの、こうはっきりと死去の経緯をお聞きになったからには、はかない命を頼りにして生存を疑いなさるわけにもいかないので、またもと通り女君は死んだのだと気弱に思い直されると、悲しくてたまらない。

「もともと真剣に思うような人ではなかったものの、やはりこうして俗世に留まっている間の慰めにはこれ以上の人はないと心惹かれたのだった。ここにこっそり迎えておけばよかったが、そうしたとて寿命が定められている命のはかなさは、決してそのような待遇に左右されるものではないはずだが、それでも目の前での死別はただ悲しさの一筋だけはあろうけれど、このように真偽がわからないという嘆きまでは加わらなかっただろうに……」と、あれこれ取り集めて思い続けなさると、女君の可憐だった顔付きや親しみ深かった様子は、今もまさに向き合っているような気持ちがなさるので、そのまま涙を催すたねとなるのであった。

【60】中納言、自室でひとり女君を追憶する

御心ちのすこしよろしくおぼさるゝ頃なれば、れいのわが御かたにてながめ給ふに、「そらにしられぬ雪」とふり行庭のけしきにも、「いづれかさきに」とまづおぼさるゝに、『猶うつろはむ』といひし日の、見しさきぐくよりもあはれに心とゞめしは、さはそれがかぎり成けり。なほたちかへり聞えてだにけしきも見るべかりきを」と、それさへかへすぐくやし。

われもさこそをしみし物をさくらばななどもろともにちらず成けむ

日は入はてぬれどひかりはなほのこれるに、うす黄ばみたるくもの棚引たる空は哀なる事にいひおきしを、物思ふごとにながめられ給ふ御心には、まして大かたならざらむや。

今はたゞむなしき空をあふぎつゝたなびく雲をかたみとや見む

〔通釈〕

母上のご病状が少しよいように思われる頃なので、中納言はいつものように自室でもの思いにふけっていらっしゃると、「空に知られぬ雪」のように桜の花びらが降り積もっていく庭の景色を見ても、「いづれか先に（この花とあの人と、どちらを先に恋しく思うことになろうと思ったことか）」と、まず故人のことが思われなさるにつけて、「『なほうつろはむことをしぞ思ふ』とあの人が言った日が、それ以前に会ったどの時よりもしみじみと心惹かれたものだが、さてはそれが最後の逢瀬だったのだ。やはりもう一度折り返し使いを遣って先方の様子を窺うべきであったなあ」と、そのことまでが返す返すも悔やまれる。

われもさこそ…（自分もあれほど惜しんだというのに、どうしてこの桜花とともに散らないでしまったのか。）

夕日は沈んでしまったが、光はまだ残っている中、薄く黄ばんだ雲がたなびいている空はあわれなことと（清少納言は）言い置いたものだが、もの思うごとについつい眺めてしまわれる中納言のお心には、まして並大抵のあわれさであろうはずがない。

今はたゞ…（今はただ空しい空を仰ぎながら、たなびく雲をあの人の形見と思って見ることにしようか。）

＊「さくらちるこのした風はさむからでそらにしられぬゆきぞふりける」（拾遺集・巻一・春・六四・貫之）を引く。　＊＊「花よりも人こそあだになりにけれいづれをさきにこひむとか見し」（古今集・巻十六・哀傷・八五〇・紀望行）を引く。　＊＊＊【39】段落で女君が詠んだ「さくら花ふかきいろかを見るままになほうつろはむ事をしぞおもふ」の歌をさす。　＊＊＊＊「日は　入日。入り果てぬる山の端に、光なほとまりて、あかう見ゆるに、薄黄ばみたる雲のたなびきわたりたる、いとあはれなり」（枕草子「日は」・新編全集二三四段）を念頭に置く。　＊＊＊＊＊「おほぞらはこひしき人のかたみかは物思ふごとにながめらるらむ」（古今集・巻十四・恋四・七四三・酒井人真）を引く。

【61】中納言、後悔に煩悶しつつ、仏道修行にはげむ

何につけてもまぎらはしがたきに、有明の月もやう〳〵たかくさし出たり。

「かばかりはなぐさめかねじさらしなやをばすて山の月には有とも

おもへば、いとよしかし。入がたき道のしるべにはなほ此なげきのしげきこそたづきにはならめ」と、いとゞ此世をかりそめにおぼしならるゝには、「中〳〵うれしきちぎり成しを、あひみしはじめつかた、『ほだしにや』などおぼえて、なれ行さへいとひてとだえがちなりけんよ」と、またうちかへしくやしきは、猶くちをしきこゝろのほどもみづから思ひしられ給ひて、御おこなひをいとまめやかにし給ふ。

〔通釈〕

中納言は、何につけても悲しみを紛らわし難いところに、遅く出た有明の月も次第に高くさし昇ってきた。

「*かばかりは…（これほどは慰めかねるまいよ。たとえ更級の姨捨山の月ではあっても。）

思えば、とてもよいことだよ。入りがたい仏道への道案内には、やはりこの嘆きの激しさこそが頼りになるだろう」と、ますますこの世をかりそめのものと思うようになられるにつけては、「彼女と出会ったのはかえって嬉しい契りであったのに、はじめの頃は『絆（ほだし）となるのではないか』などと思って、親しくなっていくのまで嫌って足が途絶えがちだったことよ」と、また翻って悔しいのは、やはり情けない根性だと我ながら思い知られなさって、仏道修行を一心不乱になさるのであった。

＊「わが心なぐさめかねつさらしなやをばすて山にてる月を見て」（古今集・巻十七・雑上・八七八・よみ人しらず）を踏まえる。

【62】母北の方、中納言の悲しみを知り、ひそかに心を痛める

かの人の七日〳〵のほうじども、よかはの何某の僧都は日頃の御とくいなりければ、の給はせつけて、たうとくせさせたまふ。御心にもたゞけふ〳〵と思ひたち給へど、此御心ちを見奉り捨むことはいかにもかたく、あはれにかたじけなきかたはまさり給へば、「行へなくきかれ奉らむことはあるまじく。かく物おもふけしきも御覧じしらば、くるしきかたてにいとほしくみだれむ（おぼしみたれんか）」とそれさへもらし給はねど、「かく」などさぶらふ人〳〵しのび聞えてければ、いみじうかなしとおぼす。「すべて何事も心にいらむ事は有まじきころしも、其けしきさへ見せずもてけちて、いとなき心ちのむつかしさをあはれに物し給ふ事」とかなしうおもひ聞え給ふ事、よのつねならず。

〔通釈〕

かの女君の七日ごとの法要を、横川のなにがし僧都は日ごろからの懇意であったので、言いつけなさって、荘厳に行わせなさる。中納言の心中でも、ただただ今日にも出家したいと思い立ちなさるの

だが、この母上のご病気をお見捨て申されることはどうしても難しく、おいたわしく畏れ多い気持ちがまさりなさるので、どこかへ姿をくらましたという知らせをお聞かせするようなことは決してあってはならず、こんなにもの思いをする様子も、ご覧になってそれと知られたら、ご病気で苦しい一方で、お気の毒にも思い乱れなさるだろう」と思って、それさえ外に漏らしなさらないのだが、「こうなのです」などと、母君にお仕えする女房たちがこっそりお耳に入れてしまったので、母君はとてもかわいそうだとお思いになる。「万事何事も関心が持てるようなことはあるはずのない頃だというのに、そのそぶりさえ見せず隠していて、いつよくなるとも知れない私のやっかいな病気を健気に介抱なさるなんて」と、中納言をいとおしく思い申されることは並々でない。

【63】母上、中納言を思いやり、右大臣家との縁談を進めず

「かく見させ給ふよに、右のおとゞへわたり給ばなむよろしかるべき。うれしと御覧ぜむに、さはやぎ給ふこともあらむ」など、中宮・中つかさのみやなどきこえさせ給ふ。上もさぼしたれど、「かゝるほどには有まじきこと」ゝうるさがり給ふに、此人しれぬ御げきさへうちそへたれば、「いとゞいかに」といとほしくて、この頃はうへさへもろともにきゝ入給はぬを、よの中にはひがくしきやうにきこゆる人も有べし。

〔通釈〕

「このように母上が少し具合よくお見えになる間に右大臣家に婿入りなさったら、きっとよろしいはずです。嬉しいと思ってご覧になると、ご病気がよくなることもあるでしょう」などと中宮や中務の宮たちが中納言に申し上げなさる。母上もそう思っていらしたのだが、中納言が「母上がご病気の間には滅相もない」とうるさがりなさるのに、今はこの人知れぬ嘆きまでが加わったので、母上は「ますます、どんなに気が進まぬことか」とお気の毒に思って、この頃は母上までが一緒になって縁談を聞き入れなさらないのを見て、世間ではひねくれたことのように陰口を言う人もいるに違いない。

【64】母上出家、病気は急速に改善する

猶御心ちのたのもしげなくおぼえ給ふまゝに、御ぐしおろしたまふ。さるは、故とのゝかくれ給ひしほどにとおぼし立しかど、「かはらぬ御さまにておとゞへ御わたりのほどをもあつかひ御覧ぜられむはよろしかるべし」などかたくよりきこえ給へば、今まですごし給ふてげり。よそぢに一つ二つあまり給へば、まだいとわかうをかしき御様なれば、有もくしく「かなし」とをしみきこゆ。

されど、いむ事のしるしにや、こよなくさはやぎ給ひて、まつりの頃はつねのおましにも出給へば、中納言殿をはじめ誰もくしうれしう思ひきこえ給ふ。

今すこしなごりのこりたれど、「かばかりに見え給へば、心もとなきほどにもあらず」とて、君は内へまゐり給ふ。

〔通釈〕

依然ご病気が頼りなさそうな気がなさるので、母上は御髪を下ろして仏門にお入りになる。と言うのも、故殿（父左大臣）がお亡くなりになった時に出家したいと思い立ちなさったのだが、「変わらないお姿のまま、中納言殿が右大臣家へ婿入りなさる時にもお世話し、晴れ姿をご覧になるのがよろしいでしょう」などと、あちらこちらから申し上げなさったので、今までそのまま過ごしておられたのであった。母上は四十歳に一つか二つ余るお歳なので、まだとても若くてお綺麗なご容姿なので、ある限り皆「悲しい」と惜しみ申し上げる。

しかしながら、受戒の効果だろうか、この上なくよくなられて、賀茂祭の頃には床を離れて普段のご座所にもお出になられたので、中納言殿をはじめ誰もかれも嬉しくお思いになるのであった。

まだ少し名残は残っていたけれど、「これほどにお見えになれば、心配なほどではない」と思って、中納言の君は参内あそばされた。

【65】中納言、中務の宮邸を訪れ、若君をあやしながら語らう

かへさに中つかさのみやへわたり給へば、宮はうへの御かたにてわか君をもてあそびておはしますほどなりけり。「かくなむ」と御せうそこきこゆれば、「こなたに」とて、もやのみすおろして入奉り給ふ。「たゞ今などはおもひかけざりしに、めづらしき御わたりかな」と、御なほしひきつくろひ、御しとねまいりそへて御對面有。

「『いかにおはすべきにか』とうちくにもなげき給へしに、かくたいらかにものし給ふこと、御心にもおとらずおぼしめす」などきこえ給ふ。「れいのあつしさにも侍らず、いとくるしげに見え侍りしかば、たゞ今かうさわやぎ給ふべくも思ふ給へらざりしに、あやしきまで御心に入聞えさせ給ふ御とぶらひのおろかならぬちからにやとよろこび思ふ給へる」などかしこまり聞え給ふに、わか君みすをひきゝて、いとうつくしき御かほにてさし出給へるを、中納言の君あふぎにてまねき給へば、すがくとあふなくはしりおはして、ひざについゐさせ給ふ。

いとらうたくて、「久しく見奉らざりしほどに、ことなくもおとなびさせ給へるかな。なにがしが子にならせ給へらむや。さらばいとゞかなしう思ひ奉らん」と聞え給へば、うなづき給ふ。「宮のおまへとは、いづれかおぼす」との給へば、宮の御かたをみやりて物しげにためらひゐ給ふを、「なほく」と聞え給へば、耳にうつくしき御くちをあてゝ、「おのれをおもふぞ。宮はむつかりてにくし」とさゝめかせ給ふさまのいはけなくをかしきに、宮、「なにく」とて近くよらせ給へば、いとゞくびにかひつき給ひて、「ゐてたちね」と身をもませ給ふに、いみじうらうたくをかしくて、いだき奉りて、例のまらうどゐのかたにおはしたれば、宮も渡り給ひて御ものがたりこまやかに聞えおはすに、くれはてぬ。

〔通釈〕

内裏からの帰途、中務の宮邸にお立ち寄りになると、宮は奥方の

お部屋で若君をかわいがっていらっしゃるところであった。「参上しました」と案内を請うと、宮は「こちらへ」と言って、母屋の御簾を下ろして中納言をお入れ申し上げなさる。「ただ今来られようなどとは思いもかけなかったのに、珍しいお渡りだね」と宮は、直衣の乱れを整え、座布団を差し出してご対面になった。

「『お母上はどうなってしまわれるのか』と内心嘆いておりましたが、このようにご平癒あそばされたことは、貴君のお心にも劣らず嬉しく思いますよ」などと中務の宮は申される。中納言は、「いつもの病気がちなさまとは異なりまして、ひどく苦しげに見えましたので、すぐにこのようにご快癒されそうにも思えませんでしたのに、宮様が不思議なほどお心にかけてくださるお見舞いの並大抵でない力かと存じております」などと、かしこまって申し上げなさるところに、若君が、御簾を引っ被って、とてもかわいらしいお顔で出て来られたのを、中納言の君が扇でお招きになると、すたすたと無遠慮に走って来られて、中納言の膝にちょこんとお座りになる。

とてもかわいくて、「長くお目にかからない間に、すごく大きくなられましたねえ。私の子におなりいただけませんか。そうしたら、もっとかわいがってさしあげますよ」と申されると、若君はうなずかれる。中納言が、「父宮様と私と、どちらがお好きですか？」とおっしゃると、若君は父宮の方を見やって、何だか気に入らなさそうな様子でためらっている。「さあさあ」と返答を促し申されると、若君は中納言の耳にかわいらしいお口をあてて、「お前の方が好きだよ。父宮は怒るからいやだ」とささやきなさる様子が、実にあどけなく可憐である。中務の宮が「なになに？」と言って近寄って来られると、若宮はいっそう中納言の首にしがみつかれて、「連れて逃げて！」と言って身をくねらせなさる、それがとてもかわいく面白くて、そのままお抱きして、いつもの客間の方へ移動なさると、中務の宮もお移りになって、ねんごろに語り合っておられるうちに、日も暮れ果ててしまった。

【66】中納言、中務の宮に咎められ、葎の宿の女君のことを語る

お前のたちばなのいとなつかしう打かをるをよきて、ほとゝぎすのいづち行らむ、いそがしげになきすてゝすぐるも、此ごろはつねよりあはれに耳とゞまりて、ふと、

時鳥こふるとつげよなき人にしでのたをさと名にはたゝずや

と、おもふ事とていはれ給ふを、「あやし。處こそ」とまぎらはし給へど、みやはいとゝうきかせたまひて、

「立帰りなきてしらせよほとゝぎすいかなる人のわかれなるらむ

かばかり思ひ給へらむことをつれなくしのび給ふは、なほ心のくまおほくへだて給へり」と恨み給ふ御さまのをかしく、あながちにかくすべきにもあらず、心ひとつにくるしきを、聞こえだになぐさまほしければ、えつゝみ給はで、「すぎし秋の紅葉のかへさに、むぐらのやどりみ入てはべりしに、らうたげなりし人のとぢられたらむ

は、いかゞおもひの外にをかしう哀におぼえ侍らざらむ。くねくしうさかしらだつものも見えず、あはれに心やすく、まことになにがしがよすがとたのむべきに、ゆゑづきたる人に侍りしかば、時まかりかよひて、世の中のうれはしさもかたみに聞えかはすにつきなからず。かれはたましてそむくべくも見え侍らざりしかば、いとゞ打すてがたくて過し給ひしに、『此やよひの末つかたに俄にうせにき』と聞つけ給ひしかど、めの前のいみじさをすてゝまかるべきにも侍らざりしほどに、其程の事はおぼつかなくて過し給ひしかど、さすがにわすれがたくて、かくとがめ聞えさせ給ふまでに御覧ぜられし事」とかたりきこえ給ふに、宮、「いとはかなくあはれ成ける事かな。かう月頃有しに、そのけしきも見せ給はざりしは、こよなきひじり心かな」ときこえ給ふ。

〔通釈〕

庭の橘の花がとても慕わしく香りを放っているのを避けて、ほととぎすがどこへ行くのか、忙しげに鳴き捨てて飛び過ぎて行くのも、この頃は普段よりもしみじみと耳が留まって、中納言はふと、

時鳥…（ほととぎすよ、恋しく思っていると告げておくれ、亡きあの人に。お前は、死出の田長という名で世に知られているじゃないか。）

と、心中思うこととしてつい口をついて出たのを、「いけない。場所柄というものがあるのに…」と言って紛らわしなさったが、中務の宮はとても耳ざとくお聞きになられて、

立帰り…（立ち戻って鳴いて知らせておくれ、ほととぎすよ。中納言がお前に頼んだのは、いったいどういう人との死別なのだろうか。）

これほど深く思っておられることを知らんぷりでお隠しなさるのは、やはり心に隠しごとが多くて隔てがましいね」とお恨みになるご様子が魅力的で、こういう人の前では無理に隠すこともできないし、心ひとつに収めておいては苦しいのでせめてお耳に入れてでも悲しみを慰めたくもあって、遠慮しきれなくて、「去年の秋の紅葉狩りの帰り道に、葎の繁った家が目に入りましたのですが、そこに可憐な感じの女性が閉じこもっていたら、どうして思いがけずも心惹かれないでしょうか。ひねくれてお節介を焼くような者も見えず、しみじみと気遣いなく過ごせて、本当に私が身を寄せるにふさわしくて、情趣ありげな人でしたので、時々通って、世の中の嘆かわしさも互いに申しかわすのに似つかわしかったのです。彼女もまた私に背くようには見えませんでしたので、ますます放っておき難くて、時を過ごしておりましたが、『この三月末頃に、急に亡くなりました』という知らせを聞きましたのですが、目の前の母の重病を捨てて出かけるわけにも参らなかったうちに、死亡前後のこともよくわからないまま過ごしました。しかし、さすがに忘れ難くて、こうして宮様にお咎めを受けるほど平静でないさまをお見せしてしまったことです」とお語り申されると、宮は、「何ともはかなく、悲しいことだねえ。ここ数か月、そんなことがあったのに、そのそぶりもお見せにならなかったのは、大変な聖心だね」と申しなさる。

＊「五月雨に物思ひをれば郭公夜ぶかくなきていづちゆくらむ」（古今集・

巻三・夏・一五三・紀友則）を引く。

【67】中納言、帰路に葎の宿の前を通り過ぎつつ、感慨にひたる

帰り給ふとて、かのむぐらの門おはし過るに、いとゞあれぬる心ちするに、月のみむかしながらにさし入も哀すくなからず。梢ばかりぞかくるゝまで見おくりぬべうみわたされ給ふに、れいのなみだのほろ〳〵と御そでにかゝりければ、

八重むぐらよもぎがもとはよそに見て行過るにもそでぞ露けき

おはしましつきても、こゝにはならひ給はねど御かたはら淋しき心ちしてねられ給はねば、例の御おこなひにまぎらはし給ひて、明がたちかうおほとのごもる。

まれ〳〵にゆめに見給へど、たゞ有し世の事、其折の心ちのみなれば、かひなくなげきくらして、夏も過、秋にもなりぬ。

〔通釈〕

お帰りになる途中、かの葎の宿の門前を通り過ぎなさると、ますますひどく荒れてしまった気がするのに、月の光だけが昔のままにさし込んでいるのも、感慨少なからぬものがある。立木*の梢ばかりが、自分の姿が見えなくなるまで見送ってくれそうに見渡されなさるにつけて、いつものごとく涙がぽろぽろと袖にかかったので、中納言はこう詠んだ。

八重むぐら…（八重葎や蓬が生い繁るこの家は、こうしてよそに見ながら通り過ぎるにつけても涙で袖が露っぽくなる。）

ご自宅に到着なさっても、ここでは女君と共寝をし慣れていらっしゃるわけでもないのに、何だかお側が寂しい気がして眠れないので、通例の仏道修行で気を紛らわして、明け方近くにお休みになる。

女君のことをごくまれには夢にご覧になるが、ただ生きていた時のこととその折の気持ちばかりが再現され、今の女君の様子や思いがわからないので甲斐がなく、嘆き暮らしているうちに、夏も過ぎはや秋にもなった。

＊「君がすむやどのこずゑのゆくゆくとかくるるまでにかへりみしはや」（拾遺集・巻六・三五一・菅原道真）を引く。

【68】中納言、母君とともに有馬温泉に赴く

うへの御心ち、猶のこり有てなやましげに見え給へり。「かゝるには、有馬の湯あみ給ふなむよろしうはべる」ときこゆる人有ければ、おほやけに御いとまきこえ給ひて、うへぐし奉りて八月十日のほどにおぼしたちけり。御おくりに人〻あまた物し給へど、「ことさらことごとしかるまじく、しのびて」との給ひて、山崎よりみな帰し給ふ。

秋の野もやう〳〵なまめかしくて、山〻のにしきもかたへ色づきつゝをかしうみゆるは、さはいへど繪にもおとるまじげ也。朝夕見むだに猶時〻にうつりかはるけぢめはこよなかるべきを、ましてめづらしう見給ふにはをかしうのみ。しづのをの田をかりていねになひもてるかほのからきもあはれに御覧ず。「是なむいなのさゝはら」

など申をきゝ給ひても、中納言どのはれいの心にまかせぬ御身にひきかけ給ひて、かゝる處にだにさゝのいほもひきむすばまほしうおぼすに、いとゞ、

かくてのみいつまでかよに有間山いなのさゝ原いなとおもへど

〔通釈〕

母上のご病気は、依然名残があってご気分がすぐれない様子にお見えになる。「このような病後養いには有馬温泉の湯あみをなさるのがよろしゅうございます」と申し上げる人があったので、中納言は朝廷に休暇を申請なさって、母上をお連れして八月十日の頃にご出発になった。お送りしようと人々が大勢集まってきたけれど、「今回はとりわけ大げさにならないよう、お忍びで行きたい」とおっしゃって、山崎から皆お帰しになる。

秋の野も次第に優美さを増して、山々の錦も部分的に色づいて美しく見えるのは、まだ盛りではないとは言え、絵画にも劣りそうにない。朝夕見ていてさえ時とともに移り変わる景色の相違は格別なはずだが、ましてや旅中で珍しくご覧になる中納言の目にはただ見事と思うばかりである。農夫が田を刈って、稲をかついでいる顔のつらそうなのもいたわしくご覧になる。「これがかの猪名の篠原*です」などと申すのをお聞きになっても、中納言殿は例のごとく思うにまかせぬ身の上に関連づけなさって、せめてこんな所にでも篠の庵を結んで隠棲したくお思いになると、ますます感慨がこみ上げて、

かくてのみ…（私はこうしていつまで俗世にとどまっているのだろうか。この有間山猪名の篠原ではないが、否、そうすべきではないと思うのだけれど……。）

＊「ありまやまゐなのささはら風ふけばいでそよ人をわすれやはする」（後拾遺集・巻十二・恋二・七〇九・大弐三位）を念頭に置く。

【69】有馬の湯治場における中納言の様子

おはしましつきて湯におりたち給ふ。七日にて心みさせ給ふに、こよなうよろしうおぼえ給へば、「今ひとまはり」とおぼしの給ふ。近きあたり、遠き国〻より、年おいたるおや・せうとやうのもの、まだわかやかなれどなやましとみゆるなどを、とかくつくろひかきいだきてのゝしりさわぐさま、いとあはれに、「なにばかりの身にもあらぬを、たえずもてあつかふらん。おもへば命こそもとめがたき物にはあれ」とまづちかきゆめの覚しがたきを思ひ出給ふ。

かゝる所にてはいとゞたぐひなげにみえ給ふを、見なれ奉る人〻さへをかしう見奉れば、ましてあたりの山がつなどはおそろしきまでおもへり。京よりもこなたかなたの御とぶらひいとしげう聞え給へば、物さびしき御たびゐの心ちもせず。そのわたりのものにもほど〳〵につけてなにやかや給はせければ、有がたく又なき事にめでのゝしりけり。

〔通釈〕

温泉に着いて湯にお入りになる。まず七日間を一巡りということ

で湯治を試みなさってみると、覿面に調子よく思われたので、「もう一巡り続けたい」と思ってそうおっしゃる。ここでは、近在や遠い国々から、年老いた親や兄のごとき者、まだ若そうだが病中と見える者などを、あれこれ世話してかき抱いて大声で騒がしくしている。そのさまを見て中納言は、しみじみ心打たれ、「どれほどの身分の者でもないのに、なぜこうしてつねに面倒を見ているのだろう。思えば、命というのはなかなか思うように求められぬものなのだ」と、まずは近くの覚ましがたい夢を思い出される。

中納言のお姿は、このような所ではいっそう比類なくお見えになるのを、普段見慣れている人々でさえ素敵だと思って拝見するのに、ましてこの辺りの田舎人たちは感動のあまり恐ろしいとまで思っている。京からも、あちらこちらのお見舞いの使者が頻繁にやって来るので、中納言はもの寂しい旅暮らしの気分にもならない。周辺の者たちにも身の程に応じて何やかや贈り物を与えたので、有り難くこの上ないことと感謝して、褒め騒ぐのであった。

【70】中納言一行、難波に移動し、住吉に詣でる

かゝるついでならで物したまふべきならねば、かへさにはなにはへわたり給ひて、それより船にてすみよしへ詣でさせ奉り給ふ。こゝかしこめづらしき御せうえうに、いよ〳〵御心ちもさわやぎはて給へば、「此御なやみのなからましかばいかで御覧ずべき」とをかしうおぼす。さぶらふ人〻はましてまして千代をもへぬべく、わかき人はすゞろに帰らまうく思ふもをかしかりけり。

〔通釈〕

このようなついでがなければいらっしゃれないので、帰途には難波に移動されて、そこから船に乗って母君を住吉へ詣でさせてさしあげなさる。あちこち珍しい風景を巡り歩いて、母君はますます気分が爽快になられたので、中納言は、「このご病気がなかったら、母上はどうしてこの珍しい景色をご覧になれたろう」と、面白くお思いになる。お付きの人々はまして、ここで千年も過ごしたく思い、若い人はむやみに帰りたくなく思うのも面白かった。

＊「いつまでか野辺に心のあくがれむ花しちらずは千世もへぬべし」（古今集・巻二・春下・九六・素性）を引く。

【71】中納言、三津の寺を訪れ、散策する

君は夕暮のほどに、さるべきかぎりひとりふたり御ともにて、そのあたり見給ふとて、「いづら、人〻のいふみつのてらは。此ほどにや」とたづねおはすに、むら雨のほろ〳〵とかゝりければ、「なにはかくれぬ」とつらゆきがかこちけんふるごとおぼし出られて、

なにしおはゞぬるとも行かむなにはがたたみのゝしまの雨の夕ぐれ

寺のさまはいとあはれに、としふりたる軒の板間にしのぶの露しげきを、こ法師ばらのうちはらひ出入もはしたなきほどにはあらず見ゆるに、例のふる事まづおぼし出て、「そうたい道なめらかにし

て僧てらにかへる」とうちずむじて、こなたかなたたゝずみありき給ふ。

〔通釈〕

中納言の君は、夕暮れ方に、しかるべき側近の従者だけ一人二人を供にして、周辺をご覧になろうとして、「どこかな、人々が言う三津の寺は。このあたりかい」とお尋ねになると、にわか雨がぽろぽろと降りかかってきたので、「名には隠れぬ」と貫之がぐちをこぼしたという古歌を思い出されて、こうお詠みになった。

なにしおはゞ…（「簑」という名前の通りならば、濡れても気にせずに行こう。この難波潟の田簑の島の雨の夕暮れを。）

寺の様子はしみじみとした情趣があり、古めかしい軒の板間に忍草が露をぐっしょりかぶっている中、小坊師たちがその露を払いながら出入りするのも、大げさ過ぎず不似合いではなく見えるので、中納言はまた例のごとく古い詩歌を思い出されて、「蒼苔路滑らかにして僧寺に帰る」と口ずさんで、あちらこちらを散策なさった。

＊「あめによりたみのの島をけふゆけど名にはかくれぬ物にぞ有りける」（古今集・巻十七・雑上・九一八・貫之）を引く。　＊＊「蒼苔路滑ラカニシテ僧寺ニ帰ル　紅葉声乾イテ鹿林ニ在リ」（和漢朗詠集・巻上・秋・鹿・三三四・温庭筠）を引く。

【72】中納言、山吹色の幡を見つけ、女君に贈った衣装を思う

ほとけの御かざりなどはいとみやびかなれど、はたのさまはさすがにとしふりしほどしるくて、いとしみふかうすゝけたるも、中〻いまやうの今めかしさより哀にをかしうおぼされて、またれけるかねのつくゞとながめゐ給ふに、山ぶきいろのはたの是はまだはなやかなるを、むかしの人につかはし給ふきぬの色おぼし出て、「もしそれにやあらむ。なきかずにきけば」と、たぐひおほかる物なれど、わすれずおぼしわたるすぢなれば、うちつけになつかしき心ちし給ひて、立よりて見給ふに、はしのかたに物かきたるやうに見ゆ。

いとゞあやしう御心とまりてみ給へば、「はないろころも身をしさらねば」と有をかの人の手と見なし給ふに、むねうちさわげど、「いかでさは有べき事ぞ」とせめて見給ふに、あるかなきかにすみがれしてかきたれど、まがふべくも見えぬに、まづほろ〳〵とこぼし給ふ。此哥のもとのゆかしければ、「また是にや」とほとけの御ひだりのかたに有をもたづね給へど、ねづみのくひけるあとのみありてもじは見えず。「此くひけるしたにや有つらん。かゝる物までそこなひけむ、さがなきものかな」とにくゝおぼさるゝも、此ふでのすさびのあながちに見まほしき御心の行へなりけり。

〔通釈〕

仏像の装飾などはとても優雅に見えるが、幡の様子はさすがに年月を経てきたことが明らかで、ひどく染みが深々と付いて煤けているのも、かえって今風の真新しさよりしみじみ心惹かれて、心待ちにしていた入相の鐘が鳴るのを聞きつつ、しんみりとものの思いに耽っていらっしゃると、山吹色の幡でこれはまだきれいなのを見て、

昔の人（葎の宿の女君）に送ってやった衣の色を思い出しなさって、「もしかしたらそれかも知れない。亡き人の数に入ってしまったそうなので……」と、ありふれた物だけれど、忘れることなく思い続けている方面のことなので、だしぬけに懐かしい気がなさって、立ち寄ってその幡をご覧になると、隅の方に何か書かれているように見える。

ますます奇妙に思い注意してご覧になると、「花色衣身をし去らねば」とあるのをあの女性の筆跡と見なしなさって、胸騒ぎがするけれども、「まさかそんなことがあるはずはない」と目をこらしてご覧になると、あるのかないのかわからぬほど墨がかすれて書いてあるが、女君の筆跡に間違いないので、中納言はまずぽろぽろ涙をおこぼしになる。この歌の上の句が知りたいので、それもまたこちらにあるのだろうかと、仏像の左の方にある幡も調べてみたけれども、鼠が食った跡ばかりあって文字は見えない。「この鼠が食った下にあったのだろうか。こんな物まで台無しにしたとはな。困ったものだ」と憎くお思いになるのも、この筆のすさびをむやみに見たい気持ちがそう向かうのであった。

【73】

ほうしのかける願文にも「大弐の御すめのばだい」など有。かゝらぬほどだにあやしうおぼしぬべきを、おもひがけぬ千とせのかたみに、なほきしかたのたしかにしらまほしければ、あきのぶをめして、「此あるじの僧はこゝに物すや。此てらをたてそめつらむむかしがたりもたづねまほしきに、ゐてまゐれ」との給ふ。

かしこまりて、しばしありてあやしき法師をゐて参る。かゝるものさへ仏の御あとをまなぶはうらやましうて、弟子にもならまほしう見給ふ。「あるじはなすべきこと有て、此ごろ京にものし侍る」と申。ふるき事たづね給ふべき様もしたらねば、たゞゆかしきことのすぢのみとひ給ふ。

「此山ぶきのはたはいづくより物しつるぞ。いまめかしく見ゆれば近きほどしるくて、あはれにきかまほしき」との給ふ。「是なむ、いにしやよひの末つかたに、つくしへ下り給ふ大二とやらんの御娘のとみにかくれ給ふとて、此寺にゐてまうでゝをさめ給ひし。其御さうそくに侍る。御しるしはあのすいかいの中に物し給ふ。御めのとにや侍りけむ、わかき女のいといたうかなしみ給へしが、かしらおろして、やがて近くおこなひ給ふ。御忌日ならでもしばくまうで來て、いまにいみじう恋なき給ふめる。なほくはしくきこしめすべきことに侍らば、かのあま君をゐて奉りてん」と申。

かたくなしうかたりなせど万まふべくもあらねば、いとかなしうわきかへる心ちしまへど、しひてつれなくもてなしたまひて、さるべき物など給はせてかへし給ふ。

〔通釈〕

法師が書いた願文にも「大弐の娘の菩提」などとある。このようでない時でさえ不審にお思いになりそうな物だが、思いがけない千

年の形見を発見して、中納言はやはり過去のことを確かに知りたく思ったので、あきのぶを呼んで、「この寺の主人の僧はここにいるか。この寺建立の由緒についての昔話も尋ねてみたいので、ここに連れて参れ」とおっしゃる。

かしこまって発っていったあきのぶは、しばらくして見苦しい法師を連れて参った。このような者までが仏の足跡を学ぶのはうらやましくて、中納言はここで弟子になりたいものだとご覧になる。僧は、「主人は所用があって、この頃は都に行っております」と申し上げる。古いことを尋ねることができるような様子もしていないので、中納言はただ知りたい筋のことだけをお尋ねになる。

「この山吹の幡はどこから寄進されたのかな。真新しく見えるので最近のものに違いなく、心惹かれて事情を聞きたいのだよ」とおっしゃる。「これはですね、先の三月末頃に、筑紫へお下りになる大弐とかいう方の娘御が急に亡くなられたというので、この寺に運んで来られて葬りなさいました。その人の装束でございます。お墓はあの透垣の中におありです。乳母子なのでしょうか、若い女がひどく悲しんでおられましたが、出家して、そのまま近くで仏道に励んでおられます。月命日以外にもたびたびやって来て、今も激しく恋い慕って泣いているようです。もっと詳しくお知りになりたいということでしたら、その尼君をお連れしてきましょう」と申す。

無骨に語るのだが、紛れもないので、中納言はひどく悲しく、心が沸き返るような気持ちがなさるけれど、しいて平静を装いなさって、しかるべき物を与えて、僧をお帰しになる。

【74】中納言、女君の墓を見つけて感慨にひたる

人〻のおもふらむもはゞかられ給へど、いづれもむつるじき限りなれ。さのみもえつゝみ給はで、ほうしのをしへしかたをそこはかとたづねいますに、いと草たかうつゆしげく、かゝる御思ひをしりがほにむしも外よりはなきそへたるに、御袖のいとまなくて道もたどくしきを、御さしぬきすこしひきあげてしひてわけ入て、それとみつけ給ふ御心まよひ、いへばさら也。

「かくまでよわく有べき事かは」とせめてためらひ、しぼりあげて、「じやうとうせうかく」などの給ひてのち、

よどむやとまちこし物をそこはかと見るになみだのたぎまさり

けり

この下にもあはれとは見給ひてむを、まつ風の聲のみをきくは、なほかゝるならひともおぼえず、いはんかたなくおぼす。

かゝれとはちぎらざりしをなき人もこけの下にや思ひいづらむ

「めぐりの草などひきのけてかひぐしくみゆるは、かのあまのしわざにや」と哀はつきせず。「いかにすべき。なほかのあまにあひてありしよの事もきかまほしきを、めしよせんも人目しげき所びむなかるべし。此かへさにみづから物せん」と思ふを、「ふとさしのぞかむもはしたなく、かれもおぼえなき心ちすべきを、猶あきのぶ行てあないきこえよ」との給ふ。

〔通釈〕

同行の人々がどう思っているかも憚られるけれども、誰もみなごく親しい者たちばかりなので、それほど遠慮しないで、さきほどの法師が教えた方向を確かなあてもなく訪ねていらっしゃると、とても草が高く繁って露が激しく、中納言のこんなお気持ちを知っているかのように虫もよそよりは声を高くして鳴いているので、中納言は涙を拭う袖で露を払う余裕がなく、道をたどるのもままならないが、指貫の裾を少し引き上げて、強いて草むらの中に分け入って、それらしき墓を見つけなさった時のお心惑いは言うまでもない。

「これほどまで心弱くてよかろうものか」と中納言は無理に心を静めて、声を絞り上げて、「成等正覚」（正しく完全な悟りの境地に達する意）などとお唱えになった後、こう詠まれた。

よどむやと…（少しは涙が淀むかと期待してここまで来たのに、そこがあの人の墓だと確かに見ると、涙はますます滝のように激しく流れ落ちるようになったよ。）

こんな中納言の有様を、苔の下（墓の中）でも感慨深くご覧になっていようはずだが、女君の返答はなくて、ただ松風の音だけが聞こえるのは、やはりこのような無情が世の定めだとも思えず、何とも言いようがなく悲しい気持ちである。

かゝれとは…（このようになれとは約束しなかったのに……。あの人は今頃苔の下でそのことを思い出しているだろうか。）

「周囲の草などを取り除いて手入れが行き届いているように見えるのは、例の尼のしわざだろうか」と思うと、しみじみとした感動は尽きない。「さて、どうしたものか。やはりその尼に会って、在りし日のことも聞きたいと思うが、呼び寄せるのも人目の多いところゆえ不都合だ。この帰りがけにこちらから訪ねて行こう」と思うが、「突然顔を出すというのも体裁が悪いし、向こうも思いがけない気がするだろうから、やはりあきのぶが行って取り次ぎを申し入れよ」とおっしゃる。

【75】あきのぶ、侍従の尼に面会する

かしこまりて行。此寺の下にて、いとちかゝりけり。門などいふべくもみえず、あはれに心ぼそきやり戸おしたてゝ、ともし火かすかにすきくよりみゆるに、そやのおこなひするなりけり。おぼゝれぬるゑかうのすゑつかた、この人さへかなしときく。

打たゝけば、「たそ」などいひてあけたり。しのび給へど、おのづからいひつたへて、「此あたりに物したまふ」などあま君もきゝて、いとくむかしを思ひ出て、『ひとぐしきほどならましかば』と、かずならぬ身のうれひさへうちまぜてなきゐたりけるに、かくおもはずなる御せうそこにあきれまどひて、中〻うれしなどもおもはず、すゞろになくめり。ことわりにおぼえて此人もうちなく。「まちおはすらむに、心ちなくや」といそぎたち帰り、ゐて奉る。

〔通釈〕

あきのぶは命を受け、かしこまって出かけた。侍従の尼の住む庵はこの寺の下にあって、ごく近かった。門などというほどのものはなく、しみじみ心細げに見える引き戸を閉ざして、灯火の光がかすかに隙間隙間から漏れているのを見ると、初夜の勤行をしているのだった。唱えながら涙にむせんでしまった回向文の終わり頃は、この人（あきのぶ）までが悲しく思いながら聞いていた。

戸をたたくと、「どなた？」などと言って開けた。中納言はお忍びでいらしたが、自然と噂が伝わって、「この辺りにいらっしゃる」などと尼君も聞いて、いっそう昔を思い出して、『もう少しまともな身の上だったらお目にもかかれるのだけれど……』と、日頃の嘆きに取るに足りない身分のつらさまで加わって泣いていたのだが、こうして思いがけない訪問にあきれ惑って、かえって嬉しいなどとも思わず、ただひたすら泣いているようである。それも無理からぬことと思って、この人（あきのぶ）も泣いた。「お待ちになっていようにぐずぐずするのは気がきかぬではないか」と思って、あきのぶは急いで立ち帰り、中納言をお連れした。

【76】中納言、侍従の尼と対面、女君死去までの経緯を聞く

ほとけの御まへに入レ奉りて、あま君かしこまりきこゆ。かゝるところとも見えず、いと物むつかしう、身をだにやすうふるまふべくも見えぬを、あはれに、「いかにしてくらす物にか」と御覧ず。いひ出べきことのはもおぼえ給はず、いといたうなき給ふ。あるじはたましてせきあぐる心ちして「かたじけなく」とも得いひ出ず。

やゝためらひたまひて、「さても、かゝるかたにてたいめんすべきとは、そのかみゆめおもひかけざりしを、是こそ定めなき世のさがには有けれ。かくふかき契りの、みしよにははかなくもわかれぬるかな。今はきゝてもかひなく、きかむにつけてはしのぶの草もつみわびぬべけれど、なほ有けむありさまのゆかしきを、くはしくきこえ給へ」との給ふ。

「きこえ。せ給ふやうに、きこえさせむにつけても、いみじき御心まどひは、なき御ためにもかへりて罪ふかゝるべき心ちし給ふれど、又おぼつかなくしのび過し侍らむもいとやくなし。かの有しむぐらのやどのあるじは、むかし人の御をばに侍り。年頃ひとり住にて過し給ひしを、きさらぎのころ、中つかさの宮の御めのとのおとこ、大弐になりてつくしへくだるに、さそはれ給ひていで立給ひし。こゝらの年月はなれずならひ給ひしかば、はるゞ物し給はんをいといみじうおぼしたりき。其日になりて、をば君おはして、『しばし御覧じおくれ。かゝるついでに物詣でもせさせ奉らむ。かばかりにてはあえなし』など聞えうごかして、しひてそゝのかし、ゐて奉り給ひし。かりそめの事と思ふたまへしかば、物などしたゝむまでも侍らず、あまなども御供にまかでさぶらひしを、其まゝ舟にうつし奉り給ふを、あさましく、かくたゆめ給ひけるほど、またおまへのきこしめさむ事、あはれ成し御こゝろざしなどおぼしつゞけて、いといたうなきしづみおはせしに、『かしこにおはしつきては、大二

のこのかみのみむぶのたゆふにあはせ奉らむ』などほのぐ聞え侍りしをきゝつけたまひて、いとゞなみだのいろふかく見え給ひしが、ひたすらなき道にとおぼし成けるにや、五日・六日すぐるまで露ばかりの物も御らんじ入ざりしが、つひにかうならせ給へり（ゝ）」と、なくくそのほどの事、いぶかしかりしくちずさびのもと、「かゝりとつげよ」ことづて、「あはときゆとも」となきこがれ給ひし、そのよのこともいとよくおぼえてかたりきこゆ。

〔通釈〕

中納言を仏前にお入れして、尼君はかしこまった。このような大きな寺のそばとも見えず、ここはとても狭苦しく、体もまともに動かせそうに見えないのを中納言は気の毒に思い、「いったいどうやって暮らしているのか」とご覧になる。口にするべき言葉も思いつかず、ただひどくお泣きになるばかりである。主人（侍従の尼）もまた涙がこみ上げてくる気持ちがして、「もったいなくも……（お越し下さいました）」とも言い出すことができない。

中納言は、少し心が静まるのをお待ちになって、「それにしても、こんなところでそなたと対面することになろうとは、あの頃は思いもかけなかったが、これこそ老少不定の世の定めなのだねえ。これほど深い契りがありながら、あの時、はかなくも別れてしまったことよ。今となっては事情を聞いても甲斐がなく、聞いたら聞いたで故人を偲ぶ思いでつらいばかりだろうけれど、やはりどうしていたのかが知りたいので、詳しく話しておくれ」とおっしゃる。

「おっしゃる通り、お話し申し上げるにつけても、あなた様がひどくお心を惑わしなさったら、亡き人のためにもかえって罪深いことのような気がいたしますけれども、またかと言って、気がかりなまま隠して過ごしますのも無益なことと存じます。――あの、かつての葎の宿の女主人は、亡くなった女の叔母でございます。長年独り住みをなさっておりましたが、二月の頃、中務の宮の乳母様の夫が大弐になって筑紫へ下るのに、誘われなさってご出発なさいました。長い年月離れず慣れ親しんでいらっしゃいましたので、叔母君が遠くへ行かれるのを、姫様はつらく思っておられました。出発の日になって、叔母君がいらっしゃって、『しばらくお見送りしてください。このような機会に物詣でもさせてさしあげましょう。このままお別れするのではあっけなくて残念です』などと申して説得し、強引に勧誘して、お連れして行かれました。ほんのかりそめの旅だと思っておりましたので、荷物を整えるほどのこともいたしませず、私もお供して来たわけなのですが、叔母君は姫様をそのまま船にお乗せなさいましたものですから、途方にくれて、こんなふうに油断させなさった間のことや、またあなた様がお聞きになった時にどう思われるかとか、これまでの心に染みたお心ざしのことなどを思い続けなさって、それはそれはひどく泣き沈んでいらっしゃったのですが、『筑紫に到着なさったら、大弐の長男の民部の大夫に姫様を娶らせ申すだろう』などとかすかに噂していましたのを聞きつけなさって、ますます涙の色が深くお見えでいらっしゃいました。姫様は、

ひたすら死んでしまいたいとお思いになったのか、五、六日が過ぎるまでほんの少しの食べ物もお召し上がりになりませんでしたが、とうとうこのようになってしまわれたのです」と、侍従の尼は泣きながら女君が亡くなった時のことを語り、また中納言が知りたいと思っていた姫君が口ずさんだ和歌の上の句についても、さらに「かかりと告げよ」と風に言づてし、「泡と消ゆとも」と中納言を思って泣き焦がれなさった、姫君在世中の言葉も、侍従の尼はとてもよく覚えていてお語り申すのであった。

＊「如何せん忍の草もつみわびぬかたみと見えしこだになければ」（拾遺集・巻二十・哀傷・一三一〇・よみ人しらず）を引く。　＊＊【50】段落で女君が詠んだ「恋しともいはれざりけり山吹の花色ごろも身をしさらねば」の歌の上の句。下の句が幡に書かれているのを発見し、中納言は上の句を知りたく思っていた。　＊＊＊【46】段落で女君が詠んだ「津の国のなにはのあしをふく風のそよかかりきと君につたへよ」の歌をさす。　＊＊＊【48】段落で女君が詠んだ「おもひ出る人もあらじなわびはてゝあはぢの島のあはときゆとも」の歌をさす。

【77】中納言、亡き女君の素姓を知る

うたがはしきかたのまじりし時だに、あかぬわかれの一すぢはいみじうおぼしたりしを、おほくはわがなさけにきえけるいのちのほどゝきこしめす心ち、うつゝともおぼえ給はねど、御そでの雫はよゝとおちけり。

「いひもて行ば、たゞみづからのあやまりになむ有ける。とくむかへましかば、かくいみじきわかれは有なんや。月ごろふるまで御なのりだにきかざりし心ぬるさのあまりぞかし。さても、いかなる人にか。今だにゆかしきを」との給ふ。

「いとびむなく、かつは『御こゝろおとりもせさせ給はむ』とつゝましうこそ。今きこえさせし御をばのこのかみは、じゞうの君として右のおとゞのうへの御かたにさぶらひ給ひしを、右大臣こそ（段甘）まだ中将に物したまひしとき、御覧じすぐさずや侍りけむ、此君生れ給ふ。たいらかには物し給ひながら、月ごろの物思ひにや、はかなくきえ給ひしかば、かの御かはりにをば君なむおふしたて給ひし」ときこゆ。

「さるべきかたにて見むもくちをしかるまじきを」と、いとゞあはれにおぼさる。「おもゝちなどのかのおとゞに似たりしはや」と、今さらおぼしあはせらる。

〔通釈〕

姫君の生死について疑わしい点がまじっていた時でさえ、飽きることなく別れてしまったのはひたすらつらく思っておられたのに、大半は自分の愛情が足りなかったゆえに消えてしまった命なのだとおわかりになった中納言のお気持ちは、現実のこととも思えないながらも、お袖から零れる涙の雫はぽたぽたと落ちるのであった。

「言ってしまえば、ただ私自身の過ちであったよ。早く迎え取っていたならば、こんなにつらい別れがあっただろうか。何か月も経

つまで、お名前さえ訊かなかった私の呑気さのあまりのことだ。――それにしても、どういう人なのかね。今さらながら知りたいよ」とおっしゃる。

すると、侍従は、「こちらから申し上げるのも具合が悪いですし、それに、『申し上げたところでがっかりなさるだろう』と思って遠慮しておりました。――今申し上げた叔母君の姉は、侍従の君と申して右大臣の北の方のところに宮仕えなさっておりました時、殿がお見過ごしにならなかったのでしょう、あの女君がお生まれになりました。安産ではあったのですが、それまで何か月にもわたるお悩みのせいでしょうか、はかなく亡くなってしまわれましたので、その母君の代わりに妹の叔母君が姫様をお育てになったのです」と申し上げる。

「右大臣の娘ということなら、しかるべき待遇で（正妻として）結婚するのも残念ではないはずの方だったのだ」と、ますます悲しくお思いになる。「そう言われれば、顔付きなどがあの大臣に似ていたよなあ」と、中納言は今になって思い合わされなさるのであった。

【78】中納言、亡き女君の菩提を弔うことを誓う

かの中だちのつきぐしくいひたりしそら言もかたり給ふ。「昔よりふかきほい有身にて、なべての人のもつなるほだしなどもあながちにかけはなれて、ひた道におもひならるれど、ひとり物し給ふうへのおぼしなげかむ心憂さに、けふまでかくてながらへぬるを、かゝるわかれは帰りてうれしかるべき道のしるべなれど、なほさは思ひなられず」とて、またいみじうぬらしそへ給ふ。

「よし、今はことぐはいひてもかひなし。はちすの露を玉とみがゝむのみこそなき人のためなるべけれ。さらにあらためてさるべきほうじをとおもふ。あるじのかへらむほどに、さ聞え給へ」。「いと有がたく、なき人の御ためはおもだゝしかるべけれど、又かろぐしくきこえなす人もはべらんは、御ためいとほしう」ときこゆ。

〔通釈〕

例の仲立ちがいかにもそれらしく話した虚言についてもお語りになる。「私は昔から仏道への深い願いのある身で、普通の人が持つという絆し（妻子）なども頑なに近付けず、ひたすら仏道を心がけてきたのだが、一人いらっしゃる母上がお嘆きになるのがいやなので、今日までこうして俗世に留まってきたわけで、このような悲しい別れはかえって喜ぶべき出家への道しるべなのだが、――やはりそうも思い切れないのだ」と言って、中納言はまたひどく涙で袖を濡らし添えるのであった。

「いや、今はあれこれ言ってもしかたがない。極楽の蓮台の上の露を玉のように磨くこと（故人の菩提を弔うべく仏道修行に専念すること）だけが亡き人のためになるに違いない。もう一度改めて、しかるべき作法で法事を執り行いたいと思う。主人の僧が帰ってきたら、そのように申しておくれ」と中納言がおっしゃると、侍従の尼は、「大変ありがたく、亡き人のためには光栄なことと存じますが、また一

方で軽率なことと悪口を申す人もおありでしたら、あなた様がお気の毒で……」と申し上げる。

【79】中納言、侍従の尼と夜明け方まで語り合い、感慨尽きず

かゝるきはの人は身のくちをしさもたどらぬ物成に、いとおもひやりふかき心の程をめやすく哀に見給ふ。「京などへも物し給へ。聞てもくあかずのこりおほかるゆめ物語もつねにきこえまほしう」となつかしう聞え給ふ。

今さらにあまのたくなはくりかへしあわときえにし人をこふらむ

とて、つきせずおしのごひ給へる御かたちの、みしをりよりもをかしうあはれになまめかしきを見奉るまゝに、しづをだまきならぬよの中ぞかへすぐもうらめしう、身もうきぬべきこゝちぞする。

「かばかりに袖やしぼりし朝夕にぬるゝはあまのならひとも（なれとも詩）かたはらいたう」ときこゆるさまもいとたえがたげ也。

つきせ御物語に明がた近うなりぬ。きり立こめて分給ふべきかたも見えぬ空のけしきにも、きしかたのあかつきおぼし出るに、かはる事のみおほくなりにしを、猶もとの身にてわれのみつれなきは、くちをしうあはれにおぼさるべし。

〔通釈〕

この程度の分際の者は、自分の身の程の情けなさもわきまえ思わぬものなのに、この尼は実に思慮深い心の持ち主であることを中納言はしみじみ好感を持ってご覧になった。「京などへもいらっしゃいよ。いくら話しても飽きることなく名残が尽きない夢物語も、いつもお話ししたくてね」と親しみ深く申しなさる。

今さらに…（今さらどうして、*海人が栲縄を繰るように繰り返し、泡のようにはかなく消えてしまった人を恋しく思うのだろうか。）

と言って、尽きることのない涙を拭っていらっしゃる中納言のご容貌が、かつて見た時よりも魅力的で優美なのを拝見すると、侍従の尼は、*倭文の苧環のように繰り返して昔に戻せない世の中が返す返すも恨めしく、涙で身も浮いてしまいそうな気がするのだった。

「かばかりに…（これほどまでに涙で袖をしぼったことがあったでしょうか。朝夕に袖が濡れるのは海人ならぬ尼の習いではあるにしても。）みっともないことで……」と申し上げる侍従の尼の様子も、まことに堪えがたそうである。

尽きることなく語り合ううちに明け方近くになった。霧が立ちこめて、分けて出て行く先も見えない空の様子にも、中納言は昔経験した暁の別れを思い出されて、あの時とは変わったことばかり多くなったけれども、なおもとの身のまま自分だけが変わらないのは、残念で悲しくお思いのはずである。

＊「いにしへのしづのをだまき繰りかへし昔を今になすよしもがな」（伊勢物語・第三十二段）を引く。　＊＊【14】～【15】段落の出来事をさす。

＊＊＊「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」（古今集・巻十五・恋五・七四七・在原業平、伊勢物語・第四段）を引く。

【80】中納言帰京、帝に謁見して報告する

かのほうじのれう、又あまのためなどおぼしやりて、こがねおほくつかはし給。

「よべはみつのてらに詣てこよなうふかし侍りしかば、御とのゐにも物し給へず」など聞え給ふ。

けふぞ京へ帰り給ふ。御むかへの人〻あまたひきつゞけ参り給ひて、なごりなくおこたり給ふをよろこびあへり。

中納言殿はまづ内に参りたまひて、ゐなかの事どもそうし給へば、ゆのかしこさをかしがらせ給ふ。

〔通釈〕

亡き女君の法事の費用、また侍従の尼の生活のためなどを配慮なさって、中納言は黄金を多くお届けになる。

「昨夜は三津の寺に参拝してひどく夜更かししてしまいましたので、お付き添いもいたしませんで……」などと母上には釈明なさった。

今日は都へお帰りになる。お迎えの人々が大勢列をなして参上して、北の方がすっかりよくなられたことを喜びあっている。

帰京すると、中納言殿はまず参内なさって、田舎のことをあれこれ奏上なさると、帝は有馬の湯のあらたかな効能に感心あそばされるのだった。

【81】秋になり、中納言の女君追憶、いよいよ深し

さわがしきほどすぐして、うへは御ぢぶつのかざりをいそぎおぼしたるに、君も元より此かたにはすゝみ給へる御心にて、もろともにあつかひ、みち〳〵の物の上手どもめしよせて、こまか成心しらひそへべくの給はせつゝ、ほうぶくやうのもの、なにくれとうち〳〵にも物し給ふに、うちまぎれ給ふやうなれど、有を見るだに恋しき秋のかなしさはなべてだに有を、まして御覧じそめしこの頃もたゞいまの心ちし給へば、床もなみだの露しげくてねざめがちなり。

つねよりもおもひぞ出るあかつきのしぎの羽がきかきあつめつゝ

〔通釈〕

何かと取り込んだ時期が過ぎるのを待って、母北の方はご持仏の飾りの準備に余念なくていらっしゃる。中納言の君ももとより仏道の方面には関心深いお心の持ち主ゆえ、母君とご一緒に算段なさって、それぞれの道の名匠たちを呼び寄せて、細やかな配慮を行き届かせるべくご指示なさり、また、法服のようなものについてもあれこれと内々にご手配なさる。そんなこんなで気が紛れなさりそうなものだけれども、元気で生きている人を見てさえも恋しくなる秋の季節の悲しさは世の常でさえあるのに、まして、女君と初めてお逢いになったこの季節もつい最近のことのような気がなさるので、中納言は寝床も涙の露でぐっしょりで、寝覚めがちである。

つねよりも…（普段よりも思い出されることだよ。夜明け方に寝覚め

て、鴫が羽掻きをするようにあの女との思い出を書き集めながら……。）

＊「時しもあれ秋やは人のわかるべきあるを見るだにこひしきものを」（古今集・巻十六・哀傷・八三九・忠岑）を引く。

【82】中納言、出家を願いつつ、ますます道心堅固となる

かくながめあかしたまふあしたの空に薄ぎりたちまよひて、まがきの菊もおぼつかなく、紅葉の色もほのかにをかしきを、はしのかたについゐて、笛をすこし吹ならし給ふに、われながらあはれにこゝろぼそければ、

笛竹の此うきふしよ世の中をそむく山路のしるべともなれ

とひとりごちゐ給ふ。

さるは、月日にそへいとゞひじりになりまさり給ふ。かのみつのあまをもたえずとぶらひ給ふに、哀にかたじけなく、「かゝらざらましかば」と、すてけるほどを嬉しうおもひけるとか。

〔通釈〕

このようにもの思いにふけりつつ夜をお明かしになる朝の空に薄霧がたちまよって、籬に咲く菊の花もぼんやりと見え、木々の紅葉の色もほのかな色合いで情趣深いので、中納言は縁近くに座って、笛を少し吹き鳴らしなさると、我ながらしみじみと心細い気持ちになって、

笛竹の…（笛の音が身にしみる。私の経験したこのつらい出来事よ、世を背いて向かう山道の道案内にでもなっておくれ。）

と独り言に詠歌していらっしゃる。

こうして、中納言は月日が経つにつれて、ますます聖になって行かれた。あの三津の寺の尼をも欠かさずお見舞いになられるので、尼は身にしみてありがたく思い、「もしこうしていなかったら、こんなにご配慮をいただくことはなかったろうに」と、夜を捨てて尼となったことをうれしく思ったとかいうことだ。

（完）

〔付記〕底本として御所蔵本の使用を御許可下さった原豊二氏に、記して御礼申し上げます。